

BiPH かわらばん 1号



【ごあいさつ】代表・樋口倫代

2014年7月のBiPH設立から3年半が過ぎました。第1期が2ヶ月半と短かったため、実はこの10月で第5期に入ります。ようやく念願のニュースレター第1号発行することができました。

まず何でもできることから、とはじめた勉強会は通算50回です。48回目にはシェア＝国際保健協力市民の会代表の本田徹さんによる講演会を、アジア保健研修所、あいち国際看護研究会との共催で開催するなど、充実させてきています。(1ページ下)また、2016年12月に1週間かけて行われた連続講演会「健康をささえる社会のしくみを考えよう」(名古屋市立大学、アジア保健研修所、JICA中部による共催)の準備と資料集編集を担当し、資料集はもうすぐみなさんのもとにお届けできると思います。(4ページ中)

そして、昨年度(2016年10月～2017年9月)に新たに挑戦したこととして、スタディーツアーのコーディネーターがありました。まだ、BiPH単独でツアー開催するにはいたっていませんが、大学生の国際保健看護サークル活動に協力する形で試験的に実施しました。保健師をめざす若い学生たちが、東ティモールで思いっきり見て、学んで、感じたことをシェアしてくれました。(2-3ページ特集)

2017年10月からの新しい年度では、今までの勉強会を維持しつつ、設立時からの目標であった東ティモールでの地域保健プロジェクト立ち上げに向けて一歩踏み出したいと思います。プロジェクトについては、追ってみなさまにご相談、ご報告する予定です。また、今まで積み上げてきた勉強会コンテンツを整理し、ウェブサイトの充実させていくことなどが課題です。小さな活動ですが、引き続きご参加とご支援をどうぞよろしくお願いいたします。

【勉強会報告:「人びとの生活と人生を支える医師・本田徹さんを囲む会」】

2017年7月9日(日)16:30～18:30、名古屋駅近くの愛知県立大学サテライトキャンパス(ウイंकあいち15階)において、「人びとの生活と人生を支える医師・本田徹さんを囲む会」が行われました。日曜日午後にも関わらず、高校生から演者の本田さんよりご年配の方まで幅広くお集まり下さいました。

サブタイトルである「デビッド・ワーナー、タイ、山谷から学んだこと」にあるように、お話は多岐に渡りましたが、す



べては「health for all」につながるものでした。”From Weakness, Strength” (弱さから力が生まれる)そして,”Nothing About Us Without Us” (私たち抜きで私たちのことを決めないで)などデビッド・ワーナー氏の言葉をシェアしていただきましたが、やはりその精神を实践してこられた本田さんならではの力強さがありました。(なお、デビッド氏が今回本田氏とタイを訪問した後に書いたタイ特集は本欄最後のURLで読めます。)

途上国で生れた技術や考え方が先進国に「逆流」(リバース)、席卷して世界標準のものとなる「リバースイノベーション」や、ルソーの「社会契約論」とHealth for Allの関係など、体や精神にプライマリ・ヘルス・ケア(PHC)が染み入っている(!)本田さんのお話は、本当に盛りだくさんでした。準備メンバーの一人の「PHCは時を経て、より深くなっていくものなんですね。」という感想は言い得て妙、だと言えるでしょう。

広報、資料準備、受付を担当したアジア保健研修所、会場確保や当日準備を担当したあいち国際看護研究会との連携も盛会の鍵だったと思います。これからも、志を同じくする近隣の団体と協力して、PHCの学びを深め、実践していくネットワークを名古屋で展開して行きたいと思います。

<https://healthwrights.wordpress.com/2017/08/13/newsletter-from-the-sierra-madre-81/> (デビッド氏タイ特集)

東ティモールスタディツアー

2017.8.26～9.3 名古屋市立大学看護学部3年 井上蘭 吉江裕子

パーツ大学での フィールドワークの参加

パーツ大学公衆衛生学部の学生と交流してきました。公衆衛生学部は、地域保健のリーダーを養成する課程です。授業の中で、村に泊まり込んで健康課題を発見し解決するフィールドワークを実践していました。

フィールドワークは①問題発見と優先順位決定、②問題解決のための実践、③評価の3部構成になっていました。私たちの訪問時期が①と②の間だったので、中間報告会に参加し、フィールドワーク先の村を見学してきました。今回のフィールドワーク先の健康課題には、衛生環境の劣悪、SISCOa(シスカ)と呼ばれる村でのアウトリーチ保健活動の認知度の低さ、低栄養、感染症がありました。これらの解決方法として、ごみ捨て場の設置、新しいトイレの設置、SISCOaの内容・開催日の情報提供、栄養・感染症についての知識の提供などの活動を計画していました。その後、6週間村に泊まり込んで活動をし、最後は村長の前で実践結果についてプレゼンテーションをする予定になっていました。フィールドワークの実習先は3年ごとに変わるとのことでした。



フィールドワーク先にて伝統織物を進呈され歓迎を受ける



パーツ大学公衆衛生学部の学生たち



中間報告会でのディスカッション

パーツ大学公衆衛生学部でのフィールドワークでは、学生が学ぶだけでなく、実際に地域人々の健康課題を解決する内容でした。さらに学生の活動内容について村民の生活の観点から村長のフィードバックをもらうことで、学生の活動を地域の生活に即したものに改善することができます。それにより、大学と地域が一体となって質の高い健康課題の解決ができ、地域の健康レベルの向上につながっているのではないかと感じました。そして、3年ごとに地域が変わることにより、東ティモール全体の健康レベルを向上することに貢献していると考えます。このように、学生が学ぶだけでなく、社会に学びを還元できる大学のプログラムが日本でも広まればよいと感じました。



フィールドワーク先の村



パーツ大学公衆衛生学部での授業参加

マウシガ村小学校訪問

山間部のアイナロ県ハトゥブリコ郡マウシガ村の小学校を訪問しました。首都のディリから車で片道4時間かかります。道路は曲がりくねった山道で、日本のようにアスファルト舗装はされていません。またあちこちで工事をしているため凹凸があり、車は激しく揺れました。東ティモールで暮らす人でさえ車酔いを起こすことは珍しくないそうです。また、雨季には舗装されていない道路はぬかるみ、車が通行できなくなることもあるそうです。

このような道路状況により、山間部に住む人々は保健医療施設に行くことが難しいです。大きな病院は都市部にあるため、重症の場合は長時間に及ぶ移動が必要になります。交通アクセスの悪さにより、必要な人に必要な医療が届かない状況を、小学校への道のりで実感することができました。

小学校では協調性の大切さを伝えるために、「じゃんけん列車」と「人間知恵の輪」を行いました。東ティモールでは日本ほどじゃんけんがポピュラーではなく、じゃんけんのルールを教えることからのスタートでした。最初は照れていた生徒も慣れてくると楽しんでくれ、最終的には全員で一つの電車をつくらしたり、人間知恵の輪を作ることができました。



マウシガ小学校への道のり



身振り手振りで行けんけんのルールを説明



人間知恵の輪



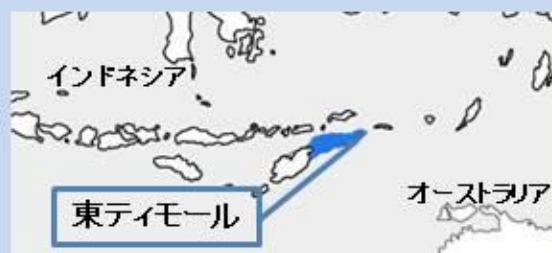
じゃんけん列車

東ティモールってこんな国！

東ティモールは2002年に独立した、アジアで一番新しい国です。それまでは16世紀からポルトガルの植民地とされ、第二次世界大戦のときは1942年から3年半の間日本軍が支配しました。1975年に東ティモールがポルトガルからの独立を宣言すると、インドネシアが武力による支配をはじめました。24年間にわたるインドネシアの支配と東ティモール人の抵抗運動の末の紛争やそれに伴う環境の悪化により国民の4分の1の命が奪われたという歴史を持った国です。

現在、東ティモールでは人口の60.6%が1日1.90ドルで生活しています(UNDP・2015)。国の保健・教育・所得の開発レベルを示す人間開発指数(UNDP・2015)は世界177カ国中133位であり、東南アジアの中でも貧しい国の一つとされています。街を歩けば輸入品が目立ちますが主要な輸出産業はコーヒーであり、上質なコーヒーで有名です。

人口:約118.3万人(2015年)
面積:約1万4,900平方キロメートル
首都:ディリ
宗教:99%がキリスト教
公用語:ポルトガル語・テトゥン語
実用語:インドネシア語・英語



【お知らせ】

1. 2018 年度勉強会

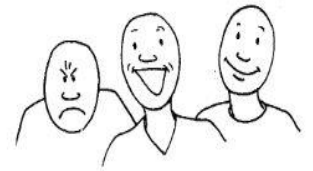
ご好評いただいている勉強会、今年度も開催します。大勢の皆様のご参加をお待ちしております。詳細は随時 HP や FB ページでご確認ください。2014 年 10 月からの「寺子屋」(10 回)と「抄読会」(10 回)、2015 年 10 月からの「寺子屋 2」(9 回)と「連続勉強会」(10 回)、2016 年 10 月からは 1 本化して「新寺子屋」(11 回)と年度ごとにニックネームを変えて開催してきました。今年度から通し番号にします。また、「こんなことが知りたい！」などがあればぜひお知らせください。

今後の勉強会(予定) 会場:昭和生涯学習センター

回	日時	タイトル	担当
51	2017 年 12 月 8 日 18:30～	東ティモールスタディツアー報告	井上蘭・吉江裕子(スタディ参加学生)
52	2018 年 1 月 26 日 19:00～	看護・医療職者の倫理を、国際研究とデュアルユース(軍民両用)から再考する	近藤麻理(東邦大学看護学部・教授)
53	2018 年 3 月 23 日 18:30～	バリアフリーの「バリア」って何だろう?～障害について考える	石本馨(NPO 法人作業療法支援ネット)
54	2018 年 5 月 25 日 18:30～	国際保健と地域保健をつなぐ～保健医療系学生が国際保健を学ぶ意味を考える	樋口倫代(BiPH・代表理事)
55	2018 年 7 月 27 日 (予定)18:30～	研修が終わっても終わらない～つながり続ける活動	林かぐみ(公益財団法人アジア保健研修所・事務局長)
56	2018 年 9 月 (日時未定)	草の根から取り組む南の島の肥満～研究と実践を並行して(仮)	水元芳(中村学園大学栄養科学部・教授)

2. 「健康をささえる社会のしくみを考えよう」資料集のお知らせ

ユニバーサル・ヘルス・カバレッジ(UHC)の推進にリーダーシップを発揮しているタイ保健省国際保健政策計画(研究所)IHPP から Viroj Tangcharoensathien 氏と若手研究者 2 名を招いて開催した連続公開講義「健康をささえる社会のしくみを考えよう」の資料集ができました。東京からのある参加者は SNS で「タイの、そして世界の Dr.Viroj がなんと名古屋にいらしています。」と書き込んで下さいました。そんな貴重なお話の数々を 1 冊にまとめています。会員のみならず、当日参加のご希望のみならず順次お送りしますので、お役立てください。



3. 会員募集

当会は活動にご賛同いただける会員の皆様方からの会費で成り立っています。ぜひ会員としてご支援ください。会員の種別、払込先は以下の通りです。

個人正会員 3,000 円/年、個人賛助会員 3,000 円/年、法人会員 30,000 円/年

振込先: ゆうちょ銀行 00870-9-126227 シャ)ブリッジズインパブリックヘルス

詳細はホームページ等をご覧ください。

【編集後記】 念願だったニュースレター第 1 号を発行することができました。これからも随時お手元に届けられるよう頑張ります。引き続きご支援の程よろしく申し上げます！

会報「BiPH ニュースレター」2018 年 1 月号 (通算 1 号)
発行: 一般社団法人 Bridges in Public Health
代表理事: 樋口倫代
〒467-0027 名古屋市瑞穂区田辺通 1 丁目 22 番地 2
TEL: 050-3415-1529 E-mail: biph-adm@umin.ac.jp
URL: <http://plaza.umin.ac.jp/biph>
FB page: <https://www.facebook.com/biph.adm/>



BiPH
Bridges in
Public Health